

原著

英文学における自然観の変遷 — Ted Hughes の動物詩 —

西村 杏子*

<要 旨>

イギリスの詩人テッド ヒューズ (Ted Hughes (1926-1998)) の作品の中には動物を主題にしたものが多い。生まれ育った Yorkshire の農場や山野で出会った動物たちである。動物を主体とした自然に対する彼の考え方は、一連の同時代のアメリカ自然詩人たちのそれとは少し違っている。アメリカの自然詩人たちの詩に登場する動物たちは野生の存在で、詩人たちは彼らを人間界とは異なった自然界の住人とみなすことが多いのに対して、ヒューズは動物をもっと身近なもの、たとえば、狩の対象となるもの、動物園のおりの中での存在としてみている。ヒューズにとって動物は人間の営みの犠牲者であると同時に自分の創作の源でもある、何か特別な存在であったといえる。晩年のヒューズは動物に代表される自然をその醜さ、残酷さを含めて崇高なものとしてみる事ができる境地に達したといえる。

また、ヒューズの動物観は彼の人生におけるさまざまな出来事を通して変化している。ヒューズの動物詩を初期、中期、そして晩年と分けてみると、詩人の自然観・人生観の変遷を知ることができる。

キーワード：動物詩 創作の源 カラス 擬人化

I. はじめに

一人の作家の作風はその生い立ちとその後の生活によって大きな影響を受けることは言うまでもない。特に感受性の鋭い詩人の場合、それは顕著である。テッド ヒューズはイギリスのヨークシャー地方に生まれ、幼年時代をすごした。祖母の農場をしばしば訪れ、10歳年上の兄と山野を駆け巡って狩猟や魚釣りの真似事もしたという。そこで詩人としての生涯にわたって題材となったキツネに出会う。Keith Sagar がいうように、ヒューズは動物詩人といってもいいほどに動物を主題とする詩作品を書いている。農場や山野で見聞した出来事とその創作の源となっている。ヒューズの自然詩に登場する動物たちは、農場のヒツジやウマであったり、動物園の檻の中の猛獣であったり、人間に狩られたキツネ、人間に飼われたカワカマスであったりする。アメリカの自然詩人たちの詩作品に登場する動物たち、冬眠から目覚めたクマや、夜の深い森で狩をするフクロウとはちがって、ヒューズの動物たちは人間界からの直接の影響を受けている。アメリカ詩の動物は人間界の外に存在し、人間は彼らの世界に一種の憧

憬を持っているかのように見えるのに対して、ヒューズの詩の動物たちは時に作者によって作者自身の身に置き換えられているかのようなのである。たとえば、彼の詩にさまざまな形であらわれるカラスはあたかも人生の悲劇的な体験に打ちひしがれた詩人の化身のようである。

ヒューズは1956年にアメリカの詩人 Sylvia Plath と結婚し、一時期 (1957-1959) アメリカ東部 ニューイングランドに住んだが、アメリカの生活にはなじまなかったようである。テッドとの間に一男一女をもうけたシルヴィアは1963年に自殺する。さらに1969年にはヒューズとの情事がシルヴィアの自殺の一因となったと考えられる Assia Wevill が自殺する。この二つの事件は2001年に出版された Elaine Feinstein の *Ted Hughes: The Life of a Poet* に詳しいが、ヒューズの人生において精神的危機であったといえる。しかし翌年1970年には彼よりずっと年下の、農園主の娘 Carol Orchard と再婚している。作品中に登場する動物に自己の姿を投影する手法をとっているヒューズは、これら生涯の波乱の出来事とその渦中にある自分の姿をどのように表現しているであろうか。この点を考察することによって、ヒューズの自然観の変遷を知ることができる。

* 西南女学院大学人文学部 人文学科 教授

II. 初期の詩

まず初期の、幼年時代に農場付近で見聞した自然（ここでは動物）を自身の「創作の炎（=源）」ととらえた時代の詩をいくつか見てみよう。

1957年に出版された最初の詩集 *The Hawk in the Rain* から、1995年に出版された *New Selected Poems 1957-1994* の冒頭に置かれた 'The Thought-Fox' をみてみよう。これは *Poetry in the Making* の中で詩人自身がその創作過程を解説する 'Capturing Animals' の章で例として使用している、よく引用される詩である。最初から 'I imagine...'（私は想像する）と書かれているように、また題名にあるようにこのキツネは「考えられた」ものである。暗闇に光る目だけが雪の上に足跡を記しながら木々の間を歩いている、

(Two eyes serve a movement, that now / And again now, and now, and now / Sets neat prints into the snow / Between trees.) その動きをあらわし、突然ツンとするあたたかいキツネの体臭 (a sudden sharp hot stink of fox) がするのであるが、キツネは頭の暗い穴に入っていく (It enters the dark hole of the head) のである。キツネは作者が見た原野の狐ではあるが、作者の想像力の産物でもある。

自然をありのままの姿でとらえること、その美しさ、躍動する生命のみならず、自然が時に見せる残酷さ、凶暴さ、漠然と存在し人間を脅かす暗闇や死をも含む自然としてとらえることは、自然詩人たちが試みていることである。ヒューズのそのような一面を示している作品、'Hawk Roosting' と 'Thrushes' と 'Pike' を1960年出版の詩集 *Lupercal* からとりあげる。「木に止まるタカ」では、ヒューズはタカを 'I' として擬人化して描き出している。高い木のでっぺんに止まって獲物を探るタカはすべての創造物をその足に捉えている (It took the whole of Creation)。傲慢に自分のテリトリーを宣言しているタカは弱肉強食という自然の掟を守っている。他からの口出しを一切許さない、自信に満ちたタカの姿は詩人に活力を与え、その創作意欲をかきたてる。この「私」は、タカであると同時に詩人自身であるといえないだろうか。

次に、「ツグミ」という詩では、イギリスでは春の訪れを最初に告げる小さく、美しい声の持ち主である小鳥を「らせん状の鋼鉄」(coiled steel)、「暗い、死をもたらす目」(Dark deadly eye) と形容する。敏捷に動いて地中からミミズを引っ張り出すのは巣で待っている

る雛たちのためではあるが…と。猛禽類であるタカと比べると規模は小さいけれどツグミも弱肉強食の世界では強者である。

カワカマスは時には1メートル以上にも達する肉食の魚であるが、ヒューズの詩に出てくるのはわずか3インチの長さである。作者はほんの10センチ足らずの幼魚を3匹水槽に飼っていた時に、いつの間にか3匹が2匹にそして最後には1匹になってしまったとこの魚の共食いの事実を暴露している。

In ponds, under the heat-struck lily pads –
Gloom of their stillness:
Logged on last year's black leaves, watching
upwards.
Or hung in an amber cavern of weeds

(池で、暑さにやられたスイレンの葉の下
彼らの静止の薄闇
去年の枯葉にくっついて上方を凝視していたり、
水草の琥珀色の洞窟の中にぶらさがっていたり)

これは詩の第3連であるが、ここに描かれているのは作者がカワカマスの捕食のときの習性を熟知していることを物語っている。Encyclopaedia Britannica から pike の項の一部を引用する。

Solitary hunters, pikes, ... lie motionless in the water or lurk in a clump of weeds. As the prey comes within reach, they make a sudden rapid lunge and seize it.

(単独で狩をするカワカマスは、水の中でじっと動かず待ち伏せしたり、水草の茂みの中に潜んでいて、獲物が近づくと突然食らいつく。)

タカもツグミもまたカワカマスもここでは、ほんの小さな動物でありながら確固たる「信念」をもって自分の命を維持する行動を遂行している。

また、「カワカマス」の中で、作者はどのくらい深いのかわからない夜の池で釣りをする、髪の毛も凍る経験を言っている。夜の闇の中には何が潜むのかわからない、自然の奥深くには人間の知恵では計り知れない神秘と恐怖があるということである。

このように初期の動物詩の動物たちは、強く、恐ろしく、不可解で、詩人の創作意欲を強く刺激するもの

をもっていた。

Ⅲ. 人生の危機にあたって

次に、ヒューズの人生の最大の危機であった1963年以後の作品から見てみよう。当然のことといえるだろうか、1963年の悲劇的な事件の後ヒューズは詩を書くことができなかつた。ようやく1967年になって出された詩集 *Wodwo* から3つの詩、‘Song of a Rat,’ ‘Skylarks’ そして ‘The Howling of Wolves’ をとりあげる。(他にも、‘Ghost Crabs,’ ‘Second Glance at a Jaguar,’ ‘The Green Wolf,’ ‘The Bear’ などこの詩集の中には動物詩が特に多い。)まず、‘ネズミの歌’で、このネズミは罠に捕らえられている。そして天と地を攻撃しているかのようにキーキー鳴いている、歯をむき出しにして(The rat is in the trap, it is in the trap, / And attacking heaven and earth with mouthful of screeches)。ネズミは結局罠から逃れることは不可能だと理解し、キーキー鳴くのをやめてうなだれてしまう、鼻の頭に血をにじませて。第2連の‘ネズミの見た幻’(The Rat’s Vision)では、ネズミは自分が棲んでいた農場のタンポポや、地面に敷かれた石炭殻や、ひび割れた水桶や星たちが‘行かないで’(‘Do not go’)と叫んでいるのを幻の中で聞く。やがてネズミは死んでいく。

‘ひばり’は2ページにわたる比較的長い詩である。ヒバリはイギリスの春をあらわす軽快な鳥でよく英詩の中で歌われている鳥である。ヒューズのヒバリは地球の引力に抗い(Against / Earth’s centre)、警告のように(Like a warning)空に向かって飛び立つ。ここでヒバリは肉食の鳥フクロウやワシよりも残酷である(Crueller than owl or eagle)。水に溺れるネズミのように(Like a mouse with drowning fur)嘆くヒバリ。胸の鼓動はモーターのように振動する(its heart must be drumming like a motor)。

All the dreary Sunday morning
Heaven is a madhouse
With the voices and frenzies of the larks,
Squealing and gibbering and cursing.

‘日曜日の朝、天はヒバリの呪うような激昂した声で満ちた精神病院である」とヒバリは従来の明るく軽快なイメージから程遠い重苦しいものとして描かれている。

‘オオカミの吼え声’では舞台は‘飢えた静寂の森’(this forest of starving silences)であり、その叫び声は苦しみから出たものか喜びからのものかわからない。オオカミは吹き渡る風に身震いする。オオカミは小さく、その理解するところは少ない(Wolf is small, it comprehends little.)。このようにネズミもヒバリもオオカミも命を謳歌する美しい自然としてでもなく、強く、残酷なものとしてでもなく、迷いに満ち悩んでいるものとして描かれている。‘Wodwo’のなかで発せられる‘What am I?’という問いの答えは得られていない。

Keith Sagar は2000年に出版された *The Laughter of Foxes: A Study of Ted Hughes* の中で、1970年に出された詩集 *Crow* について次のように述べている。

The intention was to use the figure of Crow as a means of recapitulating and correcting both his own errors and those of Western Man. Crow tries out or witnesses all the techniques of single vision — words and numbers, scripture and physics — the result is war, murder, suicide, madness. It seems that all the forms of language available to him in English, all the received, taken-for-granted, styles and discourses (including the rhetoric of Hughes’ own early poems) are so inseparable from the lies, evasions, complacencies, sentimentalities, defunct ideologies, which they have been developed to express and enshrine, the moral rigidities, and perversions of reformed Christianity, the spiritlessness of scientific rationalism and materialism, the blinkered hubris and anthropocentrism, male chauvinism, allegiance to all the wrong gods, heroes and codes, that they have ceased to have any purchase on anything Crow can recognize as real. (p.123)

つまり、カラスは作者自身、あるいはその分身であるというのである。自分自身が今まで詩人としてやってきたこと、また私人としての生活で犯した過ちを概括し訂正すると同時に、西欧社会の男性の犯した誤謬を要約し是正するための方法としてカラスを使うということである。それらの誤謬にはキリスト教社会の人

間中心主義、自然科学的合理主義・物質主義の精神の喪失、男性中心の排他主義などが含まれる。一連のカラスの歌は暗黒と疑惑と死と絶望に満ち、混乱した、正気のものとは思われぬものばかりである。たとえば、‘Two Legends’では black という言葉が、‘Examination at the Womb-Door’では death という言葉が連発される。

IV. 晩年の詩

1969年のもうひとつの悲劇、Assia とその娘 Shura のガス中毒による死の翌年にヒューズは、農場主の娘、キャロル オーチャド (Carol Orchard) と結婚する。セイガのいうように農場の仕事は厳しく大量の労働を要するので、過去の悲しい思い出にふける暇はなく、それ以後に書かれた詩の調子も変化している。*Remains of Elmet* (1979) と *Moortown Diary* (1989) からいくつかの詩をとりあげる。その前に詩集 *Season Songs* (1976) から ‘The Harvest Moon’ をみてみよう。このころまでにヒューズの詩がどのように変化しているのかがよくわかる。この詩では収穫期の月が主人公で、大きな炎のように真っ赤な月 (The flame-red moon) が昇ってきて空いっぱい広がってバスーンの様なうなり声を立て始め、地球もそれに答えて一晩中ドラムを鳴らす。すると人は眠れずにニレやオークの林に出てくる。農場のウシやヒツジも出てきて、彼らも身動きもせずに空を見上げる。すると小麦たちが、「さあ熟れましたよ。刈り取ってください」(‘We are ripe, reap us!’) と叫ぶという、まるで素朴派の画家ルソーの絵を見ているような牧歌的な風景が描かれている。

Remains of Elmet の中にある「ダイシャクシギ」‘Curlews’では、くちばしの長い水鳥ダイシャクシギたちが放物線を描いて水面上を飛ぶ様子が描かれている。色彩 (The robes of bilberry blue) と音 (their harps) に満ちた4月の霧の中の風景である。

次に *Moortown Diary* の「ノロジカ」‘Roe-Deer’をみてみよう。大雪の日に道路上に現れた2匹のノロジカと一瞬目と目を合わせる「私」。シカは私に仲間同士の合言葉を思い出すように催促する (I could think the deer were waiting for me / To remember the password and sign)。木が木ではなくなり、道路が道路でなくなったところ (And there where the trees were no longer trees, nor the road a road) でノロ

ジカと私は仲間同士として合言葉を交わすというのである。

「ダイシャクシギ」においても、「ノロジカ」においても作者は自然を静かに観照して人間である己を自然界の中に溶け込ませている。農場での生活の中で、克服することが不可能のように思われた過去の出来事から受けた打撃が徐々に氷解していくようである。自然界、特に動物の世界の生命のたくましさ、調和の美しさだけでなく、醜さ、苦痛、死などをいわば、「清濁併せ呑む」かたちで受け入れて、それを自然のもつ崇高な価値とみなすことができる境地にヒューズは至ることができた。

さらに *Moortown Diary* の中の「ワタリガラス」‘Ravens’では、もっと深く動物の世界に入り込んでいく詩人が見られる。ここではワタリガラスと子ヒツジを生んだばかりの母ヒツジが登場する。しかし、子ヒツジのうち1匹は死んで生まれてきたのである。子ヒツジの死骸は内臓も血液もまなましく描写される。「それでその子は泣いたの?」(‘And did it cry?’) と問い続ける人間の子供。ワタリガラスはその死んだ子ヒツジの内臓を引っ張り出して食いあさったのである。最後の8行はここにひとつの死があったこと、その現実を目の当たりにした幼い少年がいたこととは無関係に自然界 (カササギ、ヒバリ、スモモ、丘) の営みは静かに進行していくことを語っている。

Though this one was lucky insofar
As it made the attempt into a warm wind
And its first day of death was blue and warm
The magpies gone quiet with domestic happiness
And skylarks not worrying about anything
And the blackthorn budding confidently
And the skylines of hills, after millions of hard
years,
Sitting soft.

V. おわりに

このように詩人テッド ヒューズは動物を主題とした作品の中に自身の人生の縮図ともいえるものを読み込んだばかりでなく、自分がその一員である西欧社会を歴史的に考察してそれが犯した自然に対する犯罪を暴露するというのもしたのである。セイガがいうように、ヒューズの詩は血の世界から光の世界へ (from

world of blood to world of light) の長い道だったのかもしれない。この小論ではほんの一瞥しかできなかったが、初期、中期そして後期の詩作品をもっと詳しく読んで分析をすることによってテッド ヒューズの詩の世界を掘り下げることがこれからの課題である。

引用文献

- 1) Hughes, Ted: *New Selected Poems 1957-1994*. Faber and Faber. London, 1998.
- 2) Feinstein, Elaine: *Ted Hughes: The Life of a Poet*. A Phoenix Paperback. London, 2002.
- 3) Sagar, Keith: *The Laughter of Foxes: A Study of Ted Hughes*. Liverpool University Press. Liverpool, 2000.
- 4) Skea, Ann: *Ted Hughes: Timeline*. <http://www.zeta.org.au/~annskea/timeline.htm>. 2000.

Nature in English Literature
– On Ted Hughes' Animal Poems –

Kyoko Nishimura

< Abstract >

The British poet Ted Hughes (1926-1998) writes many animal poems, in which small animals such as foxes, and birds such as crows and thrushes, appear. He knows those animals from his boyhood in Yorkshire, and later, in his life on the farm.

In American nature poems animals are often wild beings, for example, bears just waken from his hibernation or an owl hunting in the night forest, and the poets long for becoming one with them. On the other hand, animals in Hughes' poems are often in captivity – a trapped rat, a caged jaguar and a personified crow.

Animals give the young Hughes creative inspiration. The animals in his poems of 1967 onward can be viewed as victims of human activities. In his later years, however, the poet has become able to regard nature, with its ugliness and cruelties as well as beauty and strength, as a sublime entity.

keywords : animal poems creative energy crow personification